



Title	自然観察会の反省
Author(s)	辻村, 修一
Citation	臨床哲学のメチエ. 2007, 16
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/7442
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

自然観察会の反省

自然観察会後の金曜6限「環境班分科会」でのディスカッションを参考に、以下項目ごとに反省としてまとめた。

・時間配分

当日は暑かったこともあって、行程の最後のカフェでは参加者に疲れがみられた。夏の自然観察会では行程の途中にカフェを行うのがいいのではないか。

自然文化園の場合、閉園時間が17:00となっており、今回のカフェでは「テーマ」を決めた段階で時間切れとなった。下見をするなど綿密な下調べに基づいた計画が必要であろう。

2回目の観察会では下見を行い、始まりの時間を早めた。

・アトラクション

自然のレクチャー

散策途中行われた「木の名称の説明」「常緑樹についての説明」「アメンボの語源」などは、新しい知識の提供という点では従来の自然観察会と変わらないが、漫然と散策するのではなく参加者の「気づき」をドライブするという観点から必要であろう。特に今回は、池でのレクチャーがカフェのテーマにつながった。

また、散策時に主催者が参加者の「気づき」を「拾う」ことの重要性も指摘された。

腐葉土の観察

腐葉土の中にいる生物の観察を行った。当日ルーペでの観察であったが、観察する対象に応じたツール（単眼鏡・双眼鏡・スコープ・・・）を準備する必要性の指摘があり、2回目の観察会では双眼鏡が用意された。



どんな生き物がいるかな？

音を絵に描く

絵を音に描くことによって普段気づかない環境にある様々な音を注意して拾うことができた。

絵を描いた花の丘は他の場所とは違い眺望がきいたが、中央環状線を走る車の音が聞こえ、日常的な世界から隔絶された場所ではなかった。また、花の丘は平面的な広がりを持つ場所ではあるが、高さの基準となるものがなく、聞こえてくる音の高さを表現することは難しかった。

このような反省を受け、2回目の観察会では散策の途中に観察林に面した場所で行った。

・カフェ

時間が少なく、テーマ決めまでしか展開しなかったが、参加者の「気づき」（池の底がコンクリートでできている）をうまく拾ってテーマ決めまで展開できたことはよかったのではないだろうか。

散策開始時間を早めたため、曇天から雨天になる生憎の天候にもかかわらず、2回目の観察



観察会後のカフェの様子

会では「対話」まで展開した。

・全体を振り返って

参加者が「身内」ということと初めての観察会ということから、準備期間が少なかったにもかかわらず、ある程度の成果が獲得できたのではないだろうか。暑い夏の午後で始めは気分も重かったのだが、散策が進むにつれて、参加者が主体的に共有する「場」を創造していったようだ。

そのように共有された「場」から立ち上がる「問い」は、自らのとは違う「考え」に根ざしたものであっても容易に共感を生み、自らの「問

い」としてリアリティをもって考えることができた。

ただし、今回の「気づき」は観察会が意図的に産出したものではないので、初対面の人たちが同様の行程を散策し、同様のアトラクションを行った時に今回のように「気づき」をカフェに接続することができたかは疑問である。この点に関しては、カフェに向けて「自然観察会を作り込む必要があるのか、偶然性に期待すべきであるのか」といった議論がなされたが、結論を得ることはできなかった。いずれにせよ、主催者の意図が透けて見えるような「作り込み」は避けるべきであろう。

自然観察会とカフェを接続するために参加者の観察会での「気づき」をファシリテーターが拾いあげ、それをもとに対話することで「多様な意見」を導き出す。そして、「多様な意見」による「対話」が参加者に「変容」をもたらす。その「変容」は環境問題に対する意識を根付かせるベクトルを有している。—このような流れが理想的な「自然観察会＋哲学カフェ」の流れであろう。

今回、はじめて「自然観察会＋哲学カフェ」を行うことで理想に向けて一歩踏み出すことはできたのではないだろうか。

（文責 辻村修一）